

農業技術 プリズム

以降の育苗期後半に窒素肥料を切らさないよう施肥管理する「窒素中断無し」で育苗する場合、同時期に窒素肥料を切る「窒素中断有り」の場合

長崎県のイチゴ生産は、大粒で良食味である「ゆめのか」への品種転換が進み、農家所得の向上が図られてきました。一方で、より省力的に栽培できる品種「恋みのり」が2017年から試作導入され、栽培面積は年々拡大しています。

しかしながら、他県でも栽培事例がまだ少なく、生育中に生長点が止まり減収の要因となる心止まりが発生しやすいという特性がありました。そこで、育苗期の施肥方法が収穫開始日と年内収量、定植後の心止まりの発生に及ぼす影響について調査しました。

その結果、「恋みのり」の普通促成栽培において、8月と比べて収穫開始日が早くなり、単価が高い時期である年内収量は多くなる傾向となりました。また、定植後の心止まり株も少なくなりました。

イチゴ「恋みのり」 減収要因の心止まり 育苗後半も肥効維持

「恋みのり」の育苗期窒素中断の有無による収穫開始日、年内収量、心止まり発生率

施肥方法	収穫開始日 (月/日)	年内収量 (kg/a)	心止まり発生率 (%)
窒素中断一無し	12/5	146(132) ^z	5
窒素中断一有	12/7	111(100)	15

z: () 内数字は「窒素中断一有」を100とした場合の比率 (%)

このように「恋みのり」では育苗期に肥料を切らさないことで、年内収量の増加と心止まりの減少による所得向上が期待できます。
(長崎県農林技術開発センター 農産園芸研究部門野菜研究室主任 堀田修平)